



TITLE:

観測手引(9): 遊星面の観測

AUTHOR(S):

伊達

CITATION:

伊達. 観測手引(9): 遊星面の観測. 天界 1939, 19(221): 350-350

ISSUE DATE:

1939-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167860>

RIGHT:

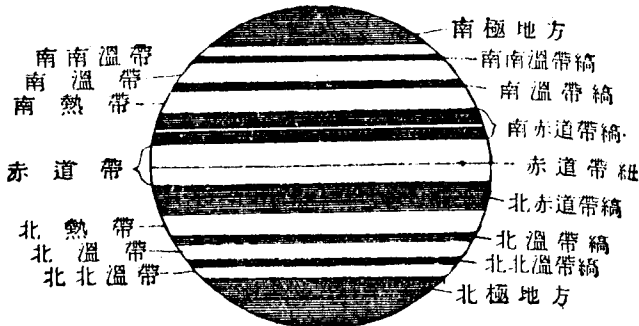
観測手引

(9) 遊星面の観測

木星観測 (2)

木星の帯縞——木星表面は帯縞があるが(圖参照)、この中最も顕著な縞は南北兩赤道帯縞でこれに次いで南北兩溫帯縞である。南北兩赤道帯縞及赤道帯は或る周期を以つて色彩の變化を繰り返してゐる。有名な大赤斑は、南熱帯に位置し、年に依つて著しく赤味が強くなつたり、又

殆んど色彩が判らず、辛うじて縞の凹陷によつて其位置は知る位の事もある。最も變化の多い縞は南北兩赤道帯縞で、凸凹、濃淡、突起、白點、黒點、攪亂等、大



口徑によるこれ等の形状は、全く物凄け許りで、其攪亂狀態を連續してキャッチする事も面白い仕事である。が、小口徑ではこれは無理である。縞の位置緯度は可及的に正しく書く事が必要で、又、縞の濃さの順位も記入しておくさ良い。

縞帯の色彩觀察は、反射鏡のみによつて正しく出来るが、同じ反射鏡でも口徑の大小により基明度は随分異なる。正しい色彩は15糎以上でないさキャッチ出来ない。

尚、唯見取圖を取るだけでも良いが、正確な時計さへあれば、各縞の特徴ある部分(例へば黒白斑、凹陷部等々)の木星ディスクの中央子午線通過時刻を、目測により計時しておくさ、其價値は非常に大さなるから、熟練家は是非試みて頂き度い。(渡邊恒夫氏が花山クック屈折鏡でこの観測をされてゐた)これによつて木星の自轉速度を頗る正しく測定出来るさ共に、各帯のズレが正しく判明する。

縞帯の自轉速度——木星の自轉速度は、何分木星表面を取り巻いてゐる雲を見てゐる關係上、部分によつて多少其速度が異つてゐる。即ち、赤道帯は9時間50分30.003秒、他の縞帯は、9時間55分5秒から9時間55分54秒位の速度で一自轉する。それで観測の便宜上これを2つの部分に分ち、赤道帯を**システム I**とし、南赤道帯縞の北縁から南極迄及、北赤道帯縞の南縁から北極迄を**システム II**とし、**システム I**は9時間50分30.003秒、**システム II**は9時間55分40.632秒として計算する。従つて當課當行の木星見取圖用紙に ω^1 ω^2 の2つがあるが、これはそれぞれシステム I と II の、光輝ディスク上の中央經度を記入する欄である。I, II の毎時毎分の自轉速度表は、伊達課長の手許にあるから入用の方は御一報を乞ふ。尚、本星の中央經度の表は、當課回報に記載されます。

木星見取圖用紙は、いよいよ9月初には印刷仕上りますから入用の方は、伊達課長宛送料添付の上申込まれたい。(伊達)